

「不平等」のくびきを背負つたまゝ続けられていたといつてよい。

従つて、日米関係の分析とは、体制的分析でなければならぬ。日本経済力の差異、経済、政治の依存と矛盾の関係、軍事支配と軍事統帥権の問題等を今日資本主義経済の客観的事態と推移及びそれに基づく政治的潮流の中で把えることである。

戦後の日米関係（アメリカによる支配）の分析態度の一つとして主として法制的側面を概説してみた。

## 水戸弘道館の研究

梶 とし

弘道館は天保十二年九代藩主斉昭によつて創設経営された水戸藩の藩校である。

弘道館の設立過程から文、武、医学館の教育内容、方法を明らかにし、更に藩の政変により弘道館の教育も左右されるが、このような時期にあつての弘道館教育の実態を究明する事が、この研究の目的である。

第一章に於て、弘道館の設立動機と、その過程を明らかにし、第二章に於て、弘道館の

教育を、隆盛期（天保十二年～弘化元年）、頓座し回復期（弘化元年～安政四年）、藩内争党期（安政五年～明治初期）の三時期に分けて考察した。天保十二年は、学神としての鹿島神社、孔子廟の遷座の祭典が行われぬため、仮開館式であり、諸制規も完備されないが、天保十三、四年は最も充実した教育が実施された。

安政五年の勅書問題以後は、閉鎖されないまでも、実質的な弘道館教育はみられず、衰退して行つた。

弘道館の歴史を見た場合、諸制規は、確かに立派であつたが、三十余年間の学校経営中起伏盛衰があり、平穩無事に教育が実施されたのは、ほんの短期間に過ぎなかつた。「学問事業不殊甚功」という建学精神を、幕末の党争に際して、文、武、医学の諸生の力を發揮し、このため、藩の有用な人材を失ひ、維新後活躍すべき人物がみられないのも、ここに起因するものと思われる。

## 正徳新例の研究

—特に廻銅抜荷信牌を

中心として—

小松徳年

序

第一章、長崎廻銅の問題

一、はしがき

二、貞享以前の銅貿易

三、貞享、元禄初年の銅貿易

四、正徳新例と長崎廻銅の問題

五、輸出銅価の問題

第二章、正徳新例を廻る抜荷問題

一、はしがき

二、抜荷実態について

三、幕府権力の抜荷対応について

四、むすび

第三章、正徳新例と信牌

一、はしがき

二、正徳新例と信牌

三、信牌問題

四、むすび

寛文・貞享期における

江戸幕府の貿易統制

—市法貨物商法を中心に—

須藤和利

江戸時代の海外貿易は、初期の相対貿易、寛永八年（一六三一）からの糸割符制、明暦元年（一六五五）から相対貿易、寛文十三（延宝元年）一六七三）から市法貨物商法、貞享三年（一七八六）春から夏にかけて糸割符復活、同年秋より定高制へと移行してゆく。

#### 糸割符制は

糸割符仲間の生糸独占による価格高騰、糸割符仲間の資力では購入出来ぬ程の国内の生糸需要増大

二糸割符商人が幕府の都市政策上存在理由がうすくなったこと等の理由により廃止され、相対貿易となつた。これは一定量の品物を日本役人立合のもとにせり、最高値のものが落札するのである。

日本側の需要が激しかったため、前にもまして価格は高くなり、貿易の主導権は外国側に移り、おびただしい金銀が海外へ流出し、高価格のせり故品物入手出来ずに破産するものもあらわれた。

これに対処するため幕府（長崎奉行）は五ヶ所より有力商人十人をえらんで札宿老とした。彼等は輸入価格を一方的に比較的安く決定し、長崎奉行の許可を得た上で外国側に通告、従がわしめた。

これは主導権獲得、金銀流出防止に効あつた。外国人側には大打撃だつた。一方、国内商人は五ヶ所に区別けされ、一ヶ所あたりの貨物量が割当てられ、五ヶ所ごとに、資本に應じて一定額まで入札により購入出来た。その利益金は市法増額といわれ、資本額に應じて配分された。これが市法貨物商法である。これは貿易額に制限ないのが欠陥であり、次の定高制へうつる。

### 筑波山事件の研究

—文久・元治期の尊攘運動の

一考察—

#### 橋崎伸一

まえがき

#### 第一章、筑波山拳兵の時代的背景

##### 第一節、水戸藩の動向

##### 二々、中央政局の動向

##### 三々、天狗党の筑波山拳兵

#### 第二章、事件の進展

##### 第一節、天狗党内部の思想的対立

##### 二々、武田伊賀の参加と内記の拡大

三々、武田正生の西上と長州藩の東上

#### 第三章、筑波山事件の歴史的 성격

##### 第一節、天狗党の思想的性格

##### 二々、天狗党の社会的基盤

##### 三々、事件の歴史的意義

#### 清朝中期における

#### 辺境異民族政策について

松本竜雄

現在中国において少数民族と云われる人々ほどのくらいの数であろうか。野原四郎氏によれば、

回族、二五五万人、ウイグル族、三六四万人、チベット、二七七万人、族、三二五万人、苗族、二五一万人、布依族、一二四万人、僳族、六六一万人

これらの諸民族は、いずれも新疆、甘肅、チベット、雲南、貴州といった中国の辺境地帯に居住している。しかも、これらの少数民族も漢民族と同様、現代中国建設のため力を尽しているのである。しかしながら、これら少数民族に対しての歴史的評価は未だ十分になされていない状態である。わずかに回民族